

昭和六十年九月十八日 石井勲先生 松下政経塾生への講義 一部

儒教と四書について

中国では孔子の教えを儒教と読んでおります。儒教の儒というのはどういう意味かという、「さんずい」の濡というのを考えてみればわかります。濡(うるおう)と言う意味、濡(うるおい)のある教えとこういう具合に考えたらいいいんです。世の中を濡わせる、世の中っていうのはどっちかっていうと、鬱々していて、殺風景です。それに対して、この濡を持たせるという、そういうような名前が古くからついております。

中国では今から 2000 年ほど以前に非常な華やかな時代がありました。戦国時代と言い、この時代に素晴らしい学者がいて、いろいろな学説が出ました。しかし、その中の中心は何と言っても、儒教です。秦が戦国時代を統一しますが、この儒教を圧迫いたしました。儒教の書物をみんな集めて、これを焼いてしまいました。それでそれを持っていた人たちは、壁に塗り込めるというようなことをしたのです。隠していたって発見されてしまいます。だから家の壁に塗り込んでしまう。それで秦が滅んでしまい、漢の時代になりますと、それが現れてきました。そして漢の時代にこの儒教がまた復活するわけです。

そしてそのときに、大体この書物が出揃って来ました。皆さんは「朱子学」ということはよく耳にしておられると思います。徳川家康が、天下を統一すると、この儒教によって治めようということ考えたわけです。藤原惺窩という学者を招き、そして林羅山を始めとする林家がずっと代々徳川家の学問の元締めになり、この人たちは朱子学者だとか言われております。それで日本の学問、つまり儒学といえば、朱子学とこういう具合に呼ばれるようになりました。

この朱子という人は宋代の人です。朱子という人は、四書つまり四つの書物が、この儒教を学ぶには大事な書物であると言いまして、それが日本に入ってきましたから、我が国ではずっとこの四書を、儒学のテキストブックとして用いるようになりました。だから四書というのは、日本人たちが学問をするのには、誰も

が読むべき書物とされたわけです。その四つの書物は『論語』と『大学』と『中庸』と『孟子』です。

『小学』に「人生れて八歳になれば、則ち王公より以下、庶人に至るまでの子弟、皆小学に入りて、(而して)之を教うるに灑掃・応対・進退の節、礼・樂・射・御・書・数の文を以てし、其の十有五年に及べば、則ち天子の元子・衆子より、以て公・卿・大夫・元士の適子と凡民の俊秀とに至るまで、皆大学に入り、(而して)之に教うるに理を窮めて心を正し、己を修めて人を治るの道をもつてす。」と書いてある。

八歳になると、もう誰もが小学校に入ることができるように、国として努力した。事實は、庶民の子と言ったって、生活が苦しい者はとても学校に行けやしませんでした。けれども、全く身分が低くても、何の地位もない人間でも、余裕があれば、学校へ行って学問が学べるというわけです。そして、十五歳になりますと、大学へ入る。どういうものが大学へ入るかという、まず天子の元子と書いてある。天子の元子は、つまり皇太子のこと。天子の跡継ぎになる。それから衆子、衆子というのは、その他の王子。だから、つまり県市の子どもはみんなということ。ただし皇太子と二つに分けたわけです。元子・衆子より、以て公・卿・大夫・元士の適子、公・卿・大夫・元士ですが、公・卿というのは上級大臣です。大夫と言うのは下級大臣、あの中国でははっきり身分が決まって、この公・卿は大体元々が王族の出です。王族の出で、日本でいえば、藤原氏。大夫というのは、その下になる。今で言えば大臣クラスです。大臣から次官級。元士というのは上級官僚。その適子というんですから跡取りです。世襲制ですから、当然、親の後を継いで大臣になる。少なくとも上級官僚になる元士の子どもだったら、まず上級官僚の子になれるわけです。

その適子です。それから、凡民の俊秀と書いてある。つまり全く身分がなくても、いわばどんな馬の骨だかわからない者でも、俊秀であれば、大学に入れる。今だってイギリスはそうじゃないですよ。凡民の俊秀はオックスフォード大学に入れない。ところが中国では、本当に家柄のない、全く無一文の者でも秀才だとなると、お金を出すものが出てくるんです。頭いいってことになるともう郷土

がこぞってその金を出して、学ばせるわけです。

そしてまずその地方試験がある。そこで合格する。一番に合格する。そういう秀才がみんなまた中央へ集まってきて、そして試験を受けるわけです。そこ一番で通れば、必ず将来は大臣が約束されるわけです。全くどこの馬の骨ともわからない者が、大臣になるっていう制度が中国にある。その学問のテキストブックの一つがこの『大学』であるこういう事なんです。『大学』というのは実をいうと、『礼記』という書物がありまして、これは孔子が編纂したと言われて、昔から伝わっています。孔子は自分は「述べて作らず」と言っておりますから、自分で編著したものはありません。昔からあったものの中から、選び抜いて整理して『礼記』という本を作ったと考えられております。その中にこの『大学』という書物が、一遍として入ってるわけです。それをこの朱子を取り出して独立した一書としてやるようになった。この孔子の学問が、曾子に伝わった。孔子の弟子は大勢おり『史記』の仲尼弟子列伝に七十二人の名前が全部出ています。そしてそれぞれの主な弟子には詳しい伝記も一人一人ついている。そういう名前が歴史に残っている弟子でも七十二人いますが、その中で、孔子の学問を本当によく受け継いだのは、曾子であると言われております。

この曾子が、孔子の教えの重要なものをまとめたものが『大学』という書物で、「曾子の書物である」と朱子は言うわけです。それは誰が書いたかわからないと、いろいろな説があるわけですが、朱子はそういう具合に曾子の言葉が出てきます。

それからこの曾子から子思に学問が伝わった。この子思というのは、孔子の孫です。孔子の子ども鯉は、孔子よりも先に亡くなってしまいます。ですから自分の子どもに学問を継がせることができなくなってしまった。早く死んでしまった。それでその学問は弟子の曾子に伝わる。そしてその曾子から孫の子思に伝わる。そしてその子思の著わしたものが『中庸』。それからさらにその学問は、孟子に伝わる。子思から孟子に伝わる。孟子の著したものが『孟子』という書物である。従って、この孔子の学問は、こういう具合に、孔子から曾子から曾子から子思、子思から孟子とこういうように伝わる。そしてそれに対して、これらの書物が一

遍ずつある。だからその総括出来る、これが朱子のいう考えであります。しかし、日本ではこれをどういう順序で、学んだらいいかということは、大体決まっているんです。一番先に読むべき書物は『大学』。それから『論語』を読む。三番目に読むのは『孟子』だとされておる。それから最後は『中庸』だという。

四書は、朱子の序文にもありますように、昔の大学で、学んだテキストブックである。そしてそこには、為政者として、大事な心構えが書いてある。これは昔の大学を出た人間はどこまでも上級官僚になる、その使命です。ですからそこに書かれてあることは、つまり上級官僚として知らなければならない、国民を治めるその要諦がそこに書かれてある。四書とはこういう書物なんです。